は殆ど完全に収録されているからである。このような便利な目録を作成された、明史研究室の曹貴林氏をはじめとする各位の御努力に対して、心からの敬意を表するものである。又、日本文をも含めた『明代文献目録』について、筆者はかねてから編纂の準備を進めてきたが、その完成を急がねばならぬ、との決意を固めた次第である。

フランソワ・ジョルジョン著

トルコ・ナショナリズムの起源について
——ユスフ・アクチュラ（一八七六—一九三五）——

新井政美

一

ユスフ・アクチュラ（Yusuf Akçura）は、トルコ・ナショナリズム（トルコ主義 Türkçülük）の歴史の中で最も重要な役割を果した人物のひとりとして知られている。一九〇八年の「トルコ協会」（Türk Derneği）、一九一二年の「トルコの炉辺」（Türk Ocağı）の事実上の設立者はアクチュラであったし、また、『トルコ人の母国』（*Türk Yurdu*）誌の編輯長として、終始それをリードしていったのもアクチュラであった。しかし、彼のこうした事績にもかかわらず、彼に関する研究が、これまであまりにもおろそかにされてきたことは明白である。トルコ主義のいまひとりの立役者、ズィヤ・ギョカルプについては、玉石入り乱れて、これまでに多くの仕事がなされてきたのに対し、アクチュラに関する研究書として、我々はただトガイ（Muharrem Feyzi Togay）の著書『ユスフ・アクチュラ、その生涯と著作』（*Yusuf Akçura, Hayatı ve Eserleri*. İstanbul, 1944）を持っているだけであった。こうした研究上の大きな空白が、いつかは埋められなければならなかったのであるが、このほど、その仕事が、トルコ人ではなくフランスのトルコ学者によってなされたのである。

本書は、ベニグセン（Alexandre Bennigsen）教授のもとで研鑽を積んだジョルジョン氏が、パリ第三大学に提出した第三期博士号請求論文に、若干の訂正を施した上で上梓したものである。序文において著者が述べているように、アクチュラは、常にその時々の現実に即して論説を書き続けていった人物であった。ために、ギョカルプの『トルコ主義の諸原理』（*Türkçülüğün Esasları*）にあたるような、系統的・理論的な著作がアクチュラには——「三つの政治路線」（Üç

Tarzı-ı Siyaset) を除いて——ない。したがって、アクチュラの評伝を書くには、まず、『トルコ人の母国』誌をはじめとする種々の新聞・雑誌の中から、彼の論文を拾い集める作業から始めなければならない。

本来なら、こうした仕事はトルコ人研究者によってなされているべきものであった。しかし、トルコ共和国においては、そうした基礎的作業がほとんどなされていない。辛うじてギョカルプについては『ズィヤ・ギョカルプ文献目録』(Ü. Binark, N. Seferioğlu, *Ziya Gökalp Bibliyografyası*. Ankara, 1971) が出版されているが、この仕事も、アンカラの国立図書館 (Millî Kütüphane) によってなされたもので、ギョカルプ研究者の力を結集した共同作業とは言い難いものであった。また、同図書館では、一九七〇年から七一年にかけて、オメル・セイフェッティン (Ömer Seyfeddin)、アフメット・ヒクメト (Ahmed Hikmet Müfitioğlu)、ファーイク・アーリー (Faik Âli Ozansoy)、アブデュルハク・ハーミド (Abdülhak Hâmid Tarhan) の文献目録を孔版印刷で出しているが、いずれも不十分なものである。こうした状況の中で、ジョルジョン氏は、アクチュラが寄稿した新聞・雑誌の中から、彼の論文を丹念に拾い集めていった。その際、筆名の問題が大きな障害となったはずであるが、ジョルジョン氏は、文体と内容とを検討することによってそれを乗り越えた。ただ、残念ながら、こうした地道な努力の結果作成されたアクチュラの著作目録は、本書では割愛されている。ジョルジョン氏自身が、その目録を完璧なものと思っていないことがその理由であるが、博士号請求論文には付されていた目録が本書で省かれ、アクチュラの用いた筆名のみがあげられているのは、やはり残念なことと思わずにはいられない。しかし、そうした基礎的な作業の上に築かれた本書が、トルコ・ナショナリズムの研究に大きく貢献したことには、寸分の疑いもない。

二

本書は本文と付録とから成る。本文は、第一章「タタール起源の汎トルコ主義（一八七六—一九〇四）」、第二章「汎トルコ主義のための戦い（一九〇五—一九一四）」、第三章「ケマリスト・トルコにおける汎トルコ主義（一九一四—一九三五）」の三章に分けられている。表題だけを見ると、汎トルコ主義が前面に押し出されているかのようだが、実際は、表題の後につけられた各年代におけるアクチュラの思想、行動に沿って書き進められていて、これは、あくまでアクチュラの評伝である。付録では、アクチュラの論説十篇と書簡ひとつとがフランス語に訳されている。さらに、一九一六年に、スイスで、アクチュラと共にレーニンに会見したア

ズィズ・メケル（Aziz Mekeر）の報告やアクチュラの似顔絵も付されている。訳出された論説は以下の通りである。「三つの政治路線」（一九〇四年。なお、この論説は全訳されているが、他のものはすべて抄訳である）、「メドレセの改革」（"Medreselerin islâhı," *Sırat-ı Müstakim*, IV/79, 1910）、「ポルトガルの革命によせて」（"Portekiz ihtilâli münasebetiyle," *Sırat-ı Müstakim*, V/III, 1910）、「中央アジア難民のための講演」（"Asya-yı vusta felaketzedegân menfaatine konferans," *Sırat-ı Müstakim*, V/128, 1911）、「革命の予兆」（"Alâim-i inkılâb," *Sırat-ı Müstakim*, V/112, 1910）、「トルコ人世界」（"Türklük," *Salname-i Servet-i Fünûn*, 1912）、「覚え書き」（"Küçük muhtıra," *Türk Yurdu*, IV/23, 1913）、「一三二九年のトルコ人世界」（"1329 Türk dünyası," *Türk Yurdu*, VI/3, 1914）、「経済政策について」（"İktisadî siyaset hakkında," *Türk Yurdu*, XII/12, 1917）、「同盟について」（"İttifak'a dair," *Siyaset ve İktisad*. 1924）、「ズィヤ・ギョカルプ」（"Ziya Gökalp," *Türk Yurdu*, I/4, 1924）。

さて、以下簡単に本文の内容を紹介してゆくことにする。まず、第一章では、十九世紀後半におけるトルキスタンとオスマン帝国との状況が概観された上で、アクチュラの生い立ちが描かれる。富裕なタタール人ブルジョアの子として生まれたアクチュラは、露土関係悪化によるロシア・ムスリムのオスマン帝国移住の波の中、家業の不振によって一八八三年、母親とともにイスタンブルへ移った。その後ロシアへ旅する機会をもったことが、彼にナショナリストとなる素地を与えたという記述は、トガイのそれと一致する。アクサライに落ち着いて、小学校を卒業してから、アクチュラは、陸軍幼年学校を経て士官学校、さらに陸軍大学へと進学する。文官学校やガラタサライ・リセなどがコスモポリタンを養成していたのに対し、士官学校は、軍医学校とともに、愛国者の揺籃であった。アクチュラも、その反専制志向により、一八九六年に捕えられ、翌九七年にはトリポリの監獄に入れられた。九八年の恩赦後もトリポリに勤務し続けた彼は、一八九九年、そこを脱出してパリへ出ることに成功した。政治学学校（École des sciences politiques）で学びながら、アクチュラは、アフメット・ルザ、アブドゥッラ・ジェヴデトら、青年トルコ人運動の指導者たちと交わり、『議会』（*Meşveret*）、『共同体会議』（*Şura-yı Ümmet*）といった、彼らの新聞にも寄稿した。

ここまで書き進めてきた後、著者は、成長過程にあったアクチュラに与えられた様々な知的刺戟にも触れ、そして、そうしたものから多くのことを吸収してロシアへ帰ったアクチュラが、いわば、それまでの研鑽の総決算として一九〇四年

に発表した論説「三つの政治路線」の検討を行なう。アクチュラへの知的刺戟としては、まず第一に、ロシア・ムスリムによるジャディード（改革）の運動、そして特にイスマイル・ガスプリンスキーの『翻訳者』（*Tercüman*）紙があげられる。また、ヨーロッパにおけるトルコ学の成果も忘れることができない。さらに、彼がパリで学んだヨーロッパの社会思想の中には、ダーウィンやスペンサーとともにマルクスも含まれていたという事実も、また、重要な指摘であろう。

さて、「三つの政治路線」であるが、著者は付録にその全訳をつけているため、内容そのものよりも、むしろ、その背後にあるアクチュラの思考の分析に、より重点をおいているように見える。オスマン主義、イスラム主義、トルコ主義のうちどれがオスマン国家に力と進歩の原動力とを与えることができるか、というのがこの論説の主題であった。「力と進歩」（kuvvet ve terakki）は、「統一と進歩」（ittihad ve terakki）へのアンチ・テーゼでもある。つまり、この論説は青年トルコ人たちにあてた批判でもあったのである。アクチュラによれば、彼らの政治的な見通しは曖昧すぎるのであった。また、彼らの求める憲法復活＝専制政治廃止という古典的なスローガンは、もはやオスマン国家再建のための有効な力たりえない、というのであった。したがって、アクチュラのこの論説には、「憲政」（meşrutiyet）という単語も一度として使われていないのである。帝国内における自由とか、帝国の統一とかいうレベルでの議論を、現実ははかるに追い越しているというのが、アクチュラの認識であった。また、アクチュラはこの論説で、ナショナリズムを、イスラムの束縛から離れた所で主張していた。例えば「民族」を表わすにも“cins”や“kavim”といった言葉の代りに“ırk”が用いられていたし、さらに、ナショナリズムを正当化するにも、後に多くのナショナリストがしたように、コーランやハディースの解釈の仕方によって、それがイスラムに反していないと主張しようとするのではなく、彼は、ナショナリズムを、歴史の必然として認めようとしていたのである。

第二章においては、一九〇五年から一四年頃までのアクチュラの動きが述べられ、また、彼の歴史観、社会観などが検討される。一九〇三年からカザンのムハンメディエ・メドレセで歴史、地理などを講じていたアクチュラは、ロシアの一九〇五年革命以後、活発に動き始める。『カザンの報道者』（*Kazan Muhbiri*）、『時』（*Vakit*）といった新聞での執筆活動に加え、ロシア・ムスリム同盟（Rusya Müslümanlarının İttifakı）の中心人物として多彩な政治活動を展開したのである。ドゥーマの選挙に際しては立憲民主党（カデット）との協力を説き、後にはその中央委員にもなるが、トルコ人世界の擁護を図る彼の運動も、結局ツァーリズムにおさえ込まれ

てしまう。検閲が再び強化されてくるとアクチュラは、ロシアからヨーロッパ、さらにエジプトと旅し、ガスプリンスキーのいるクリミアへ立ち寄った後、一九〇八年十一月に、青年トルコ人革命以後、より自由な活動が可能となっていたイスタンブルへ移っていった。

アクチュラを中心として展開されたオスマン帝国におけるナショナリズムの運動に、三つの源流があると著者は言う。つまり、ネジプ・アースム、メフメット・エミンら、アブデュルハミト時代からの民族主義的歴史家・文学者たちがそのひとつ。第二は、青年トルコ人たちと強く結びついた、『若いペン』(*Genç Kalemler*) 誌に拠る人々。そして最後が、アクチュラらのロシアからの人々である。この指摘は極めて適切かつ正当である。そして著者は、このうちの第三の流れを追おうとするのである。

一九一一年、それまでしばしば寄稿していた『真正な道』(*Sırat-ı Müstakim*) 誌が汎イスラム的傾向を強めると、アクチュラはそれを見捨てて、『トルコ人の母国』誌を創刊する。これは、トルコ人の一体化、トルコ語の簡略化と統一、教育の近代化、女性の解放などをうたい、また、ガスプリンスキーの『翻訳者』の影響を強く受けていた雑誌である。この中で、ロシアからのトルコ人と、オスマン帝国出身のトルコ人とが共同で、ナショナリズムを広めるべく努力してゆくのであるが、著者は、アクチュラとオスマン・トルコ人との間には、何らかの不協和音が存在していたのではないかと述べる。ギョカルプが一九一四年以降、『トルコ人の母国』への寄稿をやめて『社会学雑誌』(*İctimaiyat Mecmuası*)、『新雑誌』(*Yeni Mecmua*) を創刊したことなどが、その証拠としてあげられるが、著者は、彼らの間の「不和」については何を言っても想像の域を出ないとして、それ以上の追求は控えている。

さて、ロシア及びイスタンブルでのアクチュラの活動を描いた後、著者は、彼の歴史観に触れる。アクチュラは、カザンのムハンメディエ・メドレセで歴史を講じたのを皮切りに、一九一二年から一年ほどイスタンブル大学で政治史の授業を受けもち、また共和国成立後は、再びイスタンブル大学で現代史の講義を行なった。また一九三一年には、トルコ歴史学研究協会 (Türk Tarih Tedkik Cemiyeti) の総裁に任じられている。こうした経歴にもかかわらず、アクチュラの歴史家としての仕事自体には、独創的なものはなく、したがって、今日彼の著作に学問的な意義を見出す歴史家もいない。しかし、アクチュラが西欧の歴史哲学との接触によって「歴史の進歩」の観念を学んだこと、及び、彼がトルコ民族史の研究と、その結果明らかにされるはずのトルコ人の輝かしい過去とを、トルコ人の一体化を実現するためのテコにしよう

としていたことが指摘される。

次に著者は、社会変革に関するアクチュラの考えに照明をあてる。アクチュラはパリ滞在中から社会改革の必要性を説いており、単に憲法復活を望んでいた青年トルコ人たちより、一歩先んじていたと言うことができる。社会の変革は、その社会を形成する個人の変革と関わってくる。したがって、それは教育の問題と緊密につながっているのである。アクチュラは、オスマン帝国における知的伝統がスコラ的な硬直したものであると批判し、人間を、あらゆる超越的存在、偏見、教条主義から解放しなければならないとした。さらにアクチュラは、内面の問題のみに留まらず、社会構造の変革にも考えをめぐらせる。オスマン・トルコ人が、一般に、階級の観念を受け入れなかったのに対し、アクチュラは、タタール、ロシア、そして西欧の社会を実見していたために、階級及び階級闘争についての理解をもっていた。しかし、彼はタタール人の社会主義運動には批判的である。それが階級間の利害の不一致を強調するあまり、ロシア・ムスリムの団結を損っていると考えたからである。一方、オスマン帝国においては、一九一九年以前において社会主義は重要な政治勢力とは言い難かった。しかしアクチュラは、それが、ギリシア人、アルメニア人等の外国人資本家を攻撃することで、トルコ人に利益をもたらすと考えて、それを利用しようとした。『トルコ人の母国』誌に一時、社会主義者パルヴスを招いたのもそのためであった。また、ヨーロッパにおける社会主義運動についても、それが帝国主義を打倒しうるという観点から、好意的な態度を示していた。

一方、オスマン社会の分析に際しては、アクチュラは、そこでのトルコ人ブルジョアジーの不在を嘆き、そしてその育成を主張する。タタール人のナショナリズムを見ても、また十九世紀におけるヨーロッパの国民国家形成を見ても、近代国家建設におけるブルジョアジーの歴史的役割は明らかであるというのであった。オスマン帝国にそうした階級を創り出すためには、まず、商工業を蔑視するような偏見を打破することが必要であるとして、アクチュラは、『トルコ人の母国』の経済欄に力を入れ、また、商業で成功したロシアのトルコ人の話も掲載するように努めた。また彼は、それがオスマン帝国の経済を破壊するとして、自由主義経済を排し、保護貿易主義をとるリストの経済学説を支持していた。

アクチュラがこうしてオスマン社会の変革について述べる時、常にそのモデルとして考えられていたのが、タタール社会であった。彼によれば、タタール人の社会は、教育水準、宗教心、トルコ史への関心、さらに社会的、経済的な面など、いかなる観点から見ても、オスマン社会より進歩しているのであった。したがって、そのレベルにまでオスマン社会

を引き上げるのが、さしあたっての目標となった。

第三章では、ロシア・ムスリムとの連帯、一体的なトルコ人世界形成のためにアクチュラが行なった対外宣伝活動について述べられるが、その前にまず、彼の国際関係認識のありようが明らかにされる。アクチュラの国際関係分析には、ふたつの歴史的対立関係が軸にすえられている。ひとつは、トルコ民族とスラヴ民族との対立である。トルコ人のスラヴ世界への侵入と、キプチャク汗国崩壊後の勢力逆転、つまり、スラヴ民族によるトルコ民族圧迫とである。こうした認識は、必然的に、ロシアと汎スラヴ主義とを敵とみなす考え方を導き出す。第二の対立関係は、オスマン帝国を含むイスラムのヨーロッパ侵入と、これにたいするヨーロッパ勢力の反撃とである。その対立は、アクチュラの時代には、帝国主義のオスマン帝国侵略という形をとっていた。これはつまり、西欧帝国主義を敵とみなす考え方である。ロシアとの敵対関係は別として、西欧諸国について見ると、オスマン帝国には伝統的な親仏感情が存在していた。アクチュラは、この時期におけるフランスのロシアへの接近をあげて、フランスとの連帯が神話にすぎないと断じる。さらに、イギリスもロシアへ接近してしまっていた。残ったのはドイツである。アクチュラは一九一〇年に、早くも、ドイツがオスマン帝国に対して領土的な野心を持っていないことを説いている。さらに、経済政策におけるドイツの影響もある。こうして、オスマン帝国が同盟しうる国としてドイツが選ばれることになった。そして、一九一三年以降、「統一と進歩」独裁政権が親独政策をとる際にも、アクチュラの影響力が働いていたことが、著者によって明らかにされる。

一九一五年からブダペスト、ベルリン、ローザンヌなどを回ってトルコ人世界の防衛と一体性とを説いたアクチュラであったが、オスマン軍の敗北により、その努力も実ることなく終った。連合軍のイスタンブル占領後、アクチュラは抵抗運動に参加してゆくことになる。一九一九年の「民族トルコ党」(Millî Türk Fırkası) 設立、抗議集会への参加などの後、彼は一九二一年に、アンカラでムスタファ・ケマルの運動に合流する。解放戦争中は、ケマルの信任を得て、特にその対ソ政策に重要な役割を果した。その後、一九二五年まで、アクチュラはケマルの新国家建設事業に積極的に参与していった。しかし、クルド人の反乱を機に政府内での知識人の地位が低下すると、彼は教育の仕事に専念することになった。ケマルの建設してゆく国家は、決してアクチュラの望んだものと一致していたわけではなかったが、彼はロシアへは戻らず、終生共和国ですごしたのである。

三

トルコ・ナショナリズムの歴史の中で、ズィヤ・ギョカルプに比肩するほどの重要な役割を演じながら今まで忘れられてきたユスフ・アクチュラについて、これだけの体系的な分析をなしとげたジョルジョン氏の努力に対して、われわれは、まず、深い敬意を表さねばなるまい。そして、氏の仕事を踏み台として、今後、この分野における研究が一層深化されてゆくことが期待される。最後に、すでに本書の中に認めることができる、そうした今後の発展への芽と、それが持つ問題点とについて簡単に述べて、この紹介をおわりたいと思う。

これまで、ギョカルプひとりがあまりにも脚光を浴びてきたこともあってか、ジョルジョン氏は、本書のあちこちでアクチュラとギョカルプとの差を強調しようとしている。こうした視点には評者も大いに共鳴するし、また、今後の方向として、それが正しいと確信するものでもある。この点に関しても、本書は評価されねばなるまい。しかし、残念ながら、本書では、そうした著者の意気込みが、多くの場合、空転してしまっているように思えてならないのである。例えば、アクチュラと「統一と進歩」との関係について述べる時、ジョルジョン氏は、ギョカルプとちがってアクチュラがそれとの間に距離をおいていたと説き、さらにその政策にも批判的であったと書いている（四一頁）。しかし、三頭独裁期の「統一と進歩」が親独政策をとった際、そこにアクチュラの影響力が介在していたことを明らかにしたのも、ほかならぬ著者自身であった（七八頁）。

また、ジョルジョン氏は、アクチュラがタタール社会をオスマン社会の改革のモデルとしていたことを説明する際に、彼が、タタール社会をオスマンのそれよりも、よりトルコ的、イスラム的、近代的であると考えていたと述べ、そうした現実的な目標に向ってアクチュラが努力しようとしていたのに対し、ギョカルプの「トルコ化、イスラム化、近代化」（Türkleşmek, İslamlaşmak, Muasırlaşmak）では、単に、文化を持つ民衆と文明をもつ知識人との交流という、より観念的な主張が展開されていると言っている（六三頁）。しかし、要は比較のしかたである。アクチュラ自身も、知識人が民衆の生活の場におりていって交流することを望んでいたのであるし（六七頁）、民衆を重視することをナショナリズムと結びつけているという点において、両者に窮極的なちがいがあるとは言い難いように思える。ひと口に「トルコ化、イスラム化、近代化」と言っても、ギョカルプは、この表題で八篇の論説を『トルコ人の母国』誌に連載しており、その内容も多岐にわたっている。ジョルジョン氏のこの比較のしかたが

公正でないと言われても、いたしかたあるまい。正直言って、アクチュラと比較されるために、しばしば引き合いに出されるギョカルプが気の毒に思えたことが少なからずあったことも、ここで申し添えておきたい。

さらに「三つの政治路線」の分析に際しては、アクチュラ達ロシア出身のナショナリストにはトゥラニズムの傾向がなく、トルコ・ナショナリズムのそうしたロマン主義的傾向は、ギョカルプらのオスマン・トルコ人に強いと、ジョルジョン氏は書いている（二九―三〇頁）。しかし、アクチュラがトルコ人の統一を願い、その実現のために努力していたことは明らかである。トゥラニズムか否か。あるいは、どこまでが「トルコ」でどこまでが「トゥラン」か、といった議論は不毛ではあるまいか。どちらもナショナリズムである。トルコ民族としての自覚を持ち、一定の社会階層によって担われたナショナリズムの歴史が古いものか否か。さらに、己の依って立つべき国家を持っていたか否かが、むしろ本質的な問題ではないかと、評者には思えてならない。こうした見通しについては以前簡単に述べたことがあるが（「『青年トルコ』革命以前におけるナショナリストの動向」『史学雑誌』八九―一一）、ジョルジョン氏も、ツァーリズム国家とオスマン国家とに住むトルコ人の条件の差について触れてはいる（六八頁）。この方向で押してゆけば、また新たな眺望が開けてくるのではあるまいか。本書は、アクチュラの評伝であるために、あえてそこまでは書き進まなかったようにも思われるが、とまれ、今後のジョルジョン氏の研究の発展が楽しみでもあり、また恐ろしくもあるような、本書の出現ではある。

François Georgeon, *Aux origines du nationalisme turc, Yusuf Akçura (1876—1935)*. Éditions A.D.P.F., Paris, 1980. 154p.